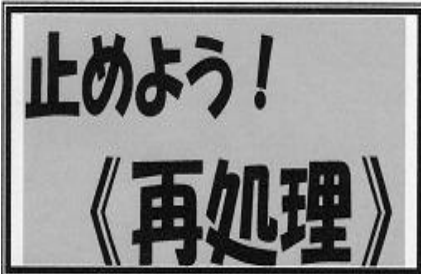


**三陸の海を放射能から守る**  
**岩手の会** (略称) **三陸の海・岩手の会**  
 郵便振替 02240-5-102650  
 ホームページ 《再処理/岩手の環境》  
<http://sanriku.my.coocan.jp/>  
 《本紙の全バックナンバー掲載》



**《天恵の海》**  
 2018(平成 30)年  
 2月4日  
 第186号  
 編集事務局 S.Oshida  
 TEL・FAX 019-623-1636

# 日本原燃 海洋放出トリチウム 遠くで検出、近くで不検出の怪

六ヶ所再処理工場沖合いの放出口を示すブイ

多量のトリチウムが流された!

2007(平成19)年10月:10回投棄			
日	排水量	トリチウムの量	トリチウム濃度
	立法リ	兆ベクレル	億ベクレル/リ
2日	585	99	1.7
4日	585	85	1.5
6日	586	83	1.4
11日	584	70	1.2
13日	586	50	0.85
17日	575	0.024	0.00042
18日	587	52	0.89
19日	543	52	0.96
27日	582	19	0.33
31日	586	13	0.22
計	5799	523.	

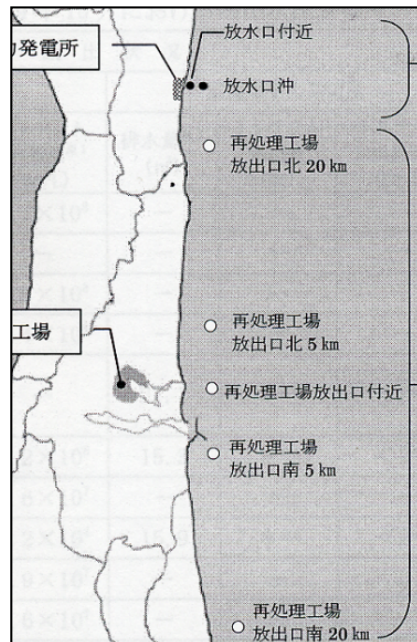
『海洋放出廃液の詳細データ』は下記。  
<http://sanriku.my.coocan.jp/07.4.1-08.3.31.pdf>

私達「三陸の海・岩手の会」は、六ヶ所再処理工場のアクティブ試験で発生した放射性廃液がどのように海洋放出され、検出はどうかだったのか、特に「トリチウム」の海水濃度についてデータを集め調べてきました。使用済み核燃料のせん断溶解が開始された二〇〇六年四月から終了の二〇〇九年三月までの「トリチウム廃液の海洋放出」は二〇七回です。この間日本原燃は年間一二回、青森県は六回、合計五四回海水を採取し測定し全て検出限界値(二Bq/L未満)以下(ND)と公表しています。しかし、流されたトリチウムは原発規制値の数百倍から最高二八〇〇倍にも達する高濃度でありしかも多量です。特に二〇〇七年一〇月は本格操業に近い放出がありました。日本原燃や青森県の測定では放出口真上、五ヶ所先、二〇ヶ所先の海水からいずれも不検出NDでした。ところが同時期に更に遠くの二五ヶ所先の海水を調べた東北電力は検出していたのです。原燃は検出されたトリチウムの起源は自社の廃水であることを認めています。なぜこんな不思議なことが起こるのか調べてみました。

## 採取日時を操作した疑いあり

公開されているモニタリング報告				
2007(平成19)年10月:海水のトリチウム				
日	試料	実施者	地点	トリチウム濃度(Bq/kg)
3日	海水	青森県	六ヶ所放出口付近	ND
			上記北20ヶ所付近	ND
			上記南20ヶ所付近	ND
10日	海水	日本原燃	六ヶ所放出口付近	ND
			上記北5ヶ所付近	ND
			上記南5ヶ所付近	ND
10日	海水	東北電力	東通原発放出口付近	4
			上記放出口沖	3
23日	魚類自由水	青森県	六ヶ所村前面海域	2

\* 10日 東北電力による 東通原発排水の調査  
 \* 23日 青森県による魚類検査 結果ND(単位Bq/kg生)



当会の『海水トリチウム検査疑惑に関する検証レポート』は ホームページに掲載してあります。  
<http://sanriku.my.coocan.jp/1801Iseai3ver2.pdf>  
 添付資料として『海洋試料トリチウムの測定結果について』(青森県・原燃・東北電力・平成二十年四月二四日)もご覧下さい。

# 放出口付近の測定

## 海流秒速約二〇センチ

放出口は水深四四メートルあり、五八五立方メートルの廃液が毎時八八立方メートル約六時間半かけて放出されます。放出口での廃液の速さは直上に向けて五・六メートル/秒と公表されています。トリチウム廃液は海水に比べて軽い液体ですが、当時の海流の流れは測定記録から「北北西へ平均速度約二〇センチ/秒」と考えられ、北北西へずれるながら上昇すると考えられます。海水が、前に放出されたトリチウムにより汚染されていない場合、放出口直上海面採取の海水にトリチウムが検出されないことはありえます。

# 十月十日の測定

## ◆「放出口北五キロ」のNDについて

原燃は北五キロのNDを十月十日測定しています。ここに十月六日放出された廃液が流れ着くのは潮流のデータから、先端部約七時間後、流れ過ぎるのが十四時間後との計算が出来ます。従って「四日後（九六時間後）」では流れ去った可能性が有ります。

## ◆放出口の二五キロ北にある東北電力東通原発で検出

十月十日に東北電力が東通原発沖で測定しています。六日に放出口から放出された廃液が、二五キロ北で検出されたのですから海流の速さは七・二センチ/秒程度になります。この場合、放出口から五キロの原燃測定地点に到達するのは十九時間であり二六時間後には通過してしまっています。日本原燃が四日後（九六時間後）に測定した場合NDになるのは当然です。

以上、データを確かめることにより、二〇〇八年十月測定については、日本原燃・青森県が海流データを基に採水日を調整し、トリチウム含有海水の通過前もしくは通過後の日を選んでNDになるように採水日を操作したと推定されます。

# 十月三日の測定

## 放出口北二〇キロND

北二〇キロで十月三日測定しています。ここに十月二日に放出された廃水が流れ着くのは潮流のデータから、先端部約二八時間後、流れ過ぎるのが三五時間後との計算が出来ます。従って、翌日には未だ到達していない可能性が有ります。

## モニタリング値をどう考えるか

まず、再処理工場の廃液放出回数に比して、モニタリング回数が少な過ぎます。(係留式ブイから放出口上部海水の流向・流速はリアルタイムで分かるようになっている)

大量のトリチウム廃液を海洋へ流し、3年間54回もその海水を調べ全て不検出というのはあまりに不自然です。東海再処理工場沖、ラ・アーク沖、セラフィールド沖のいずれの海水からもトリチウムは検出されています。

2006年アクティブ試験操業前の段階に岩手県三陸の市町村長が沿岸漁業を守るために立ち上がり大きな抗議行動を起こしました。そのため、抗議の声が高まることを恐れ、日本原燃と青森県はトリチウムのデータを操作、例えば海洋放出と海流データを確認し不検出となるように、海水採取日を操作したのではないかとの疑念が消えません。

# 忘れまい！ 「三陸はるか沖地震」

	三陸はるか沖地震	本年1月24日の地震
起きた日時	1994年12月28日21時19分	2018年1月24日19時51分
震源地	北緯40度25分 東経143度45分	北緯41度00分 東経142度26分
マグニチュード	7.5	6.3
深さ	0 km(浅い)	34km
震度	震度6(八戸) 震度5(青森、むつ、盛岡) 震度4(苫小牧、函館、宮古)	震度4(八戸市南郷、野辺地、盛岡市藪川) 震度3(六ヶ所村尾駮)
津波	八戸、宮古で50cm	なし
主な被害	死者3人 負傷者788人 家屋全壊72棟半壊429棟 停電7万6000戸	なし
六ヶ所村付近	尾駮港船だまりの岸壁破壊等	特に異常は報道されていない
再処理工場	建設中	高レベル放射性廃液の蓄積



## 水めがね

先週の夜、家でテレビを見ていたら地震があった。速報では盛岡は震度5。震源が下北半島東方沖というので内心かなり緊張した。津波なし、大きな被害は出ていないようであり、安心。

◆しかしこの時思い出したのは、阪神大震災直前に起きた『三陸はるか沖地震』である。はるか沖といっても震源地は八戸市東方約一九〇キロくらい。八戸市やむつ市で被害があり六ヶ所村でも尾駮港船だまりの岸壁がめっちゃめちゃに破損した。◆さらに、二〇〇九年四月に、この『天恵の海』で三陸はるか沖地震について記事にしたことを思い出した。内容は、「十余年前、はるか沖地震で被害を受けた尾駮港の岸壁が人目につかないように雪解けを待たずに急いで修復された」という記事だ。はるか沖地震の一九九四年は六ヶ所再処理工場は起工されたばかりだった。そして記事を書いた二〇〇九年はその十余年後。六ヶ所再処理工場ではアクティブ試験が強行され海や空に放射能をまき散らし危険な高レベル放射性廃液を貯め続けていた。◆三陸はるか沖地震の直後に六ヶ所村の取材を敢行した作家広瀬隆氏や田島雅美氏らは雑誌『宝石』で再処理工場が地震に弱いことを訴えた。その時撮られた写真は再処理工場が地震に遭った場合どうなるかを教えてくれる。◆高レベル放射性廃液は、ガラス固化しないかぎり、液体状では地震には全く弱い。漏れれば一九五七年のソ連の「ウラルの核大惨事」なみの苛酷災害となるだろう。(尚)